

【オピニオン】 ★災害に強い県土の実現に向けて 神奈川県知事・黒岩祐治

19/11/18 08:00 Cf

この秋は、日本列島全体が巨大な台風や大雨に次々襲われ、私たちは改めて災害の恐ろしさを痛感させられました。神奈川県も全力を尽くして対応してきましたが、行政の危機対応の観点から学ぶことはたくさんありました。

9月の台風第15号の際、千葉県で広範囲にわたって長期の停電が続いたことが大きな話題になりましたが、神奈川県内でもがけ崩れなどにより各地で停電や断水が発生していました。横浜の金沢臨海部産業団地では記録的な高波により、多くの工場が浸水でたいへんな被害を受けました。私たちがその対応にあくせくしている時、たまたま新内閣の閣僚のみなさんと話す機会がありましたが、その際、驚くことを言われたのです。

「神奈川県の対応が素晴らしいって、われわれの間で話題になっていますよ」

それはたいへんにありがたいことではありましたが、実はその時、私には何が評価されているのか、正直、分かりませんでした。ただ、唯一、思い当たる節と言えば、台風被害の対応に当たっているずいぶん早い段階で、DMAT（災害派遣医療チーム）のドクターが、知事室いきなり飛び込んできて直訴されたことがありました。なぜ、彼が県庁にいるのか、その時は不思議に感じていましたが、実は早々と県庁に詰めていて、停電の医療機関に連絡を取り、重症患者の移送などを進めていてくれたのでした。

それは毎年、行ってきた自衛隊から在日米軍まで参加する神奈川独自の大規模な災害医療支援訓練・ビッグレスキューかながわによって、いざという時は県庁内にDMATが詰めかけるシステムが出来上がっていたからでした。災害が起きてから知事をはじめとする県職員がどう対応したかはいつも厳しく問われます。それは当然ですが、いざという時に誰がどうするかを事前に徹底的に準備し、顔の見える関係をつくるなど態勢を整えておくことこそ、県にとっては最重要課題なのではないでしょうか。神奈川県の対応ぶりが評価されていたというのは、おそらくそういった側面が政府に見えていたということなのではないでしょうか。

ただ、どんなに準備していても、また、新しい事態にいかに対応していても、一連の流れの中で一点でも不十分なことがあれば、厳しい評価を受けることになるんだということも、体験しました。台風第19号による城山ダムの緊急放流に関して、私たちは前日からダムの水位を下げ、情報を異例の早さで市町に伝達し、当日も私自身が動画で呼びかけ続けるなど、私たちとしては120%の対応をしたつもりでした。しかし、最終的に緊急放流は22時と発表した後、急きょ、30分早まった際に、市町に瞬時に伝達できませんでした。結果的にはそのことだけが大きく報道され、市町村長からもお叱りを受け、私自身が謝罪する羽目になってしまいました。

災害対応で100%はなかなか困難なことかもしれません。しかし、人のいのちに直接関わることでですから、行政としては、常に100%を目指し続けなければなりません。今回の台風第15号、第19号への対応のすべてを、よかったこともダメだったことも含めて、私たちは徹底的に検証する作業を進めています。県庁職員はもともと県民の役に立ちたいという思いを持っています。そのマインドをさらに高めていくためにも、正しい評価は大切です。こういった作業の積み重ねによって、少しでも災害に強い県土を実現していこうと思っています。（了）

（2019年11月18日）

黒岩祐治（くろいわ・ゆうじ）氏のプロフィール

1954年神戸市出身。早稲田大学政治経済学部卒業後、80年フジテレビ入社。「FNNスーパータイム」や「報道2001」でキャスターを務める。97年よりワシントン駐在。99年「(新)報道2001」キャスターに復帰。2009年に同社を退社し、国際医療福祉大学大学院教授に着任する。11年4月神奈川県知事に初当選し、現在3期目。

※本印刷物は時事通信社 UAMPサービスから印刷されました。

Copyright JUI PRESS Ltd. All Rights Reserved.



神奈川県知事・黒岩祐治